**聖霊降臨節第14主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年8月27日**

**「人の思いと神の思い」**

**イザヤ書8章13節**

**8:13 万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏るべき方は主。御前におののくべき方は主。**

**使徒言行録5章17～42節**

**5:17 そこで、大祭司とその仲間のサドカイ派の人々は皆立ち上がり、ねたみに燃えて、**

**5:18 使徒たちを捕らえて公の牢に入れた。**

**5:19 ところが、夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、**

**5:20 「行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」と言った。**

**5:21 これを聞いた使徒たちは、夜明けごろ境内に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間が集まり、最高法院、すなわちイスラエルの子らの長老会全体を召集し、使徒たちを引き出すために、人を牢に差し向けた。**

**5:22 下役たちが行ってみると、使徒たちは牢にいなかった。彼らは戻って来て報告した。**

**5:23 「牢にはしっかり鍵がかかっていたうえに、戸の前には番兵が立っていました。ところが、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」**

**5:24 この報告を聞いた神殿守衛長と祭司長たちは、どうなることかと、使徒たちのことで思い惑った。**

**5:25 そのとき、人が来て、「御覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、境内にいて民衆に教えています」と告げた。**

**5:26 そこで、守衛長は下役を率いて出て行き、使徒たちを引き立てて来た。しかし、民衆に石を投げつけられるのを恐れて、手荒なことはしなかった。**

**5:27 彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。**

**5:28 「あの名によって教えてはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」**

**5:29 ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。**

**5:30 わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。**

**5:31 神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。**

**5:32 わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししておられます。」**

**5:33 これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。**

**5:34 ところが、民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルという人が、議場に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、**

**5:35 それから、議員たちにこう言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にしなさい。**

**5:36 以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。**

**5:37 その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた。**

**5:38 そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、**

**5:39 神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、**

**5:40 使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。**

**5:41 それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、**

**5:42 毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。**

**「正常性バイアス」という言葉を皆さんはご存じでしょうか。予期せぬ出来事に遭遇した時に「たいしたことじゃない」「このくらいなら大丈夫」「自分は大丈夫」と判断し、平静を保とうとする心のメカニズムのことです。例えば、ここ数年大雨による水害が各地で発生しています。50年に一度と言われる大雨が毎年のように降り、河川の氾濫や洪水により、床下浸水床上浸水が発生し、家が流されるなどして多くの尊い命が奪われています。テレビで被災された方がインタビューに答え「今までうん十年ここに住んでいるけど初めての経験」とか「今までこんなに水が来ることがなかったから大丈夫だと思っていた」とよく言われます。それが正常性バイアスです。「今まで大丈夫だったから今回も大丈夫だろう」「私は大丈夫」と、何の根拠もないのにそのように思い込んで勝手に判断して油断して逃げ遅れてしまうのです。**

**これは何も災害だけのことではありません。私たちが日常の生活を送る中でも多々あることです。「今までこのやり方でやってきたからこれからもこのやり方で大丈夫」「自分だけは大丈夫」という何の根拠もない思い込みは、人間関係さらには神様との関係においても必ずしも正しいといえる判断ができなくなってしまうのです。**

**それは本日私たちに与えられた御言葉で言いますと、大祭司とその仲間のサドカイ派の人々、さらには最高法院の人々、つまり使徒たちを迫害した人たちがまさにそうです。彼らは父なる神様の前に常に正しいことをしているという自負があります。自分は正しいこいつらは間違っている、それが彼らの考え方の基本です。自分は常に正しい、こいつらは間違っている、神の前に罪を犯している、だから裁かないといけない、処罰を加えないといけない。彼らはまかり間違ってももしかしたら自分たちは神様に逆らう者となることを微塵たりとも考えないのです。**

**「ソロモンの回廊」で共に集まり礼拝をし、伝道をする教会の群れを見て、彼らは使徒**

**たちを捕まえて牢に入れました。すると、夜中に天使が現われて牢の扉を開けて「行って神殿の境内に立ち、命の言葉を残らず語り続けなさい」と言い、使徒たちは天使の言われるとおりに命の言葉を語りました。最高法院は使徒たちが牢の中でおとなしくしていると思っていたので牢に下役たちを差し向けますが、牢はもぬけの殻。その報告を聞いた最高法院に「使徒たちは神殿の境内で教えている」と告げる者がいました。下役たちは使徒たちを捕らえて、最高法院の中に立たせ、「あの名すなわちイエス・キリストの名によって教えてはならないと厳しく命じておいたではないか」と厳しく問い詰めました。しかし、使徒たちは「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。私たちはあなたたちが殺した主イエス・キリストの復活の証人です」と決して怯むことなく大胆に答えたのです。最高法院の人々は頭にかーっと血が上り、使徒たちを殺そうと考えたのです。使徒たちにとっては絶体絶命のピンチに追い込まれました。**

**しかし、そのような時に全く思いがけないところから助けが入ったのです。それが最高法院のメンバーの一人で律法の教師でファリサイ派に属するガマリエルという人物です。ガマリエルは民衆全体から尊敬されている非常に人望の厚い人です。また、このガマリエルは後に大伝道者となる使徒パウロの律法の先生です（使22：3）。**

**そのように人々から尊敬されて人望の厚いガマリエルは、使徒たちを助けるために言うというよりは自分自身が、また目の前に怒りに周りが見えなくなっている人たちに自らが神の前に本当に正しいのかを問うように言うのです。「彼らの扱いは慎重にするように」とまず言います。そして、ガマリエルはテウダとガリラヤのユダの名を上げて、以前にも指導者のような人物が民衆を扇動して立ち上がったけれども、彼らは殺されてその活動は滅んでしまった。それは「人間の思いから出たものは上手くいかずに、神が滅ぼしてくださる」という信仰による言葉です。そして38節39節でこのように言います。**

**「5:38 そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、**

**5:39 神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」**

**最高法院は彼の言葉に従わざるを得ません。使徒たちを鞭で打ち、イエスの名によって語ることを再び禁止して釈放しました。しかし、使徒たちはイエス様のために苦しみを受け、イエス様と同じように苦しみを受けたことに喜び、毎日神殿の境内や家々でイエス・キリストの十字架と復活の福音を語り続けたのです。**

**私はガマリエルが使徒たちを殺そうとしている最高法院の人たちに言った言葉がとても大切だと思いますし、その信仰の姿勢は多いに学ぶところがあると思うのです。**

**「5:38 そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、**

**5:39 神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」**

**38節の「ほおっておくがよい」はもとの言葉を直訳すると「彼らがするに任せよ」です。それは言い換えるならば「神に任せよ」ということです。彼らの行いが人の思いにすぎないことか神の御心に適うことなのか、全ては神様がご存じなのだ。人の思いにすぎなければ上手くいかずに神様が滅ぼして下さるし、神様の思いに適うことであれば彼らの行動は神様に祝福される。それをお決めになるのは神様である。その神様にお任せしなさい。お委ねしなさい。ということです。**

**さらには神様の御心に適う正しい行動を彼らがしているとしたら、それなのに「あいつらは神の前に間違っている自分たちは正しい」と勝手に判断して彼らを裁くということは、神を裁くことであり神に逆らうことになるのだ。本当に自分の考えと行いが神の前に正しいかどうかをよく祈って吟味しなさい。ガマリエルはそのようにも言っていると思います。**

**このガマリエルの信仰の姿勢って私たちにとってもとても大事だと思います。恐らくこのガマリエルという人は民衆全体から尊敬されており、最高法院の一同がガマリエルの言葉に従うことを考えると、信仰深い人であり常に神様の御心を祈り求めていて皆から一目を置かれていた人ではないかと思うのです。自分の思いは行いは神様の御心に適うことなのか、それとも人の思いにすぎないのか、それは神様の前に正しいことなのかどうかを謙虚に常に祈り求めて人々に信仰者の姿を示していたのではないかと思います。それは自分の正常性バイアスを常に疑い、神様の御心はどこにあるのかを祈り求める歩みをしていたと思います。**

**私たちが自分の思っていることや自分がしていることや、これからしようとしていることが人の思いからではないのか、神様の思いに適っていることなのかを常に問うて祈り求めることはなかなか大変なことですがとても大切なことです。常に神様を礼拝し、御言葉に聞き、聖書を読み、祈り謙遜な思いを持ち続けること、このことを大切にしないと私たちは**

**「これこそが神様の御心に適うことだ」と絶対的な自信を持ち、頑なな心でそのことを推し進めようとしてしまい、その時私たちは「私は神様の御心に適う正しいことをしている」「私はこれまで神様の前に正しい歩みをしてきた。だからこれからも正しい歩みができるんだ」「私は大丈夫」と信仰における正常性バイアスが働いてしまうのです。その結果適切な判断ができなくなってしまうのです。それはつまり自己絶対化してしまい、さらには自分が神になってしまうという私たちが一番してはいけない罪に陥ってしまうのです。**

**私たちは小さな者にすぎません。神様の御心に適った思いでいてまた神様の御心に適った行動ができているのかどうかはわからない、いやむしろできない弱く小さな者です。そうであるからこそ、私たちはそのような私たちを愛して下さるイエス様の十字架と復活の愛に常に立ち帰り、礼拝し、御言葉に聞き、聖書を読み、祈り謙遜な思いを持ち続けることが大切なのです。それは、使徒パウロの言葉を借りるならば「信仰者の自己吟味」（1コリント13：5、ガラテヤ6：4）を常に続けることが大切なのです。**